植民地朝鮮の大衆小説と「南洋」という幻想

Hyeyoung JUNG (鄭惠英 : Visiting professor of General Education Department
Kyungpook National University)
✉ jhy2109@hanmail.net

(韓国)慶北大学校教育革新本部招聘教授。韓国近代文学専攻。著書に『幻影の近代文学』(ソウル：ソミョン出版, 2006)、『植民地期文学と近代性』(ソウル：ソミョン出版, 2008)、『探偵文学の領域』(ソウル：ヨクラク出版, 2011)、『大衆文学の誕生』(ソウル：アモールムンディ, 2016)など。

The Popular Novels of Colonial Chosun and the Fantasy of 'Namyang', Focused on *The Golden Cave*

The term “Namyang Archipelago” has been forgotten in Korea. Although the Namyang Islands were imbricated in the lives of Koreans during the colonial period, few Koreans know the term nowadays. During the colonial period, “Namyang Fever” was prevalent in Chosun. Namyang was thought of as an idealized land, but its natives were described as uncivilized barbarians. Such contradictory views are found in Kim Nae-sung’s adventure novel for boys *The Golden Cave*, published in 1937. This study examines the meaning of the obsession with Namyang in colonial Chosun, concentrating in particular on this novel.

When the novel was published in 1937, Chosun was undergoing a mania for gold and a veritable gold rush. During this period, Kim Nae-seong was drawing readers’ attention to the Namyang Islands by describing them as the place where *The Golden Cave* is located. It was not that Kim Nae-seong wanted to encourage people to migrate to the Namyang Archipelago out of self-interest. All the children who go on adventures in the novel try to use the gold they have found in the public interest, through initiatives such as building an orphanage. They are aiming for a life that abandons the primacy of “one’s desire,” “one’s success,” and “one’s joy”, and think only of the public interest. This form of life meant 殉忠, “giving one’s life for the country,” which the Japanese Empire required of colonial Koreans during this period.

Keywords Kim Nae-sung(金來成), *The Golden Cave*(黄金窟), Namyang Archipelago(南洋諸島), Gold Rush(黄金狂), Adventure Novel(冒険小説)

1 南洋諸島という用語

現在、韓国で「南洋諸島」という用語は死語である。しかし、植民地時代という特定の歴史的期間においては、「南洋諸島」は朝鮮人の生活と深い関わりを持っていた。「南洋諸島」という用語が朝鮮に登場したのは、植民地時代が始まる直前の1907年頃と推定される。1907年5月25日付の『皇城新聞』には、清の軍艦が自国平民の保護と、海外国民に海軍の復興経費を補助してもらうため、南洋を巡航するという内容の記事が掲載された。巡航地は香港、シンガポールを通してフィリピンのルソン島へ向かい、帰ってくるルートになっていた¹。やはり、同年9月4日に日本の貿易商が南洋の無人島を発見したという記事が掲載される²。この記事に続き、1909年8月21日と9月26日付の『大韓毎日申報』に北米合衆国の南洋探検に関する記事と、アメリカが南洋開拓のために人々を派遣するという記事が掲載された³。

当時、朝鮮は世界の地理に対する認識がきちんと整っていないだけでなく、太平洋地域の島探検をはじめ、いかなる種類の探検に対しても、神経を使う能力も、余力もなかった。そのような点から、1907年に掲載された朝鮮新聞の南洋関連の記事は、日本、中国、アメリカの関心を反映させたものと推定される。その後、植民地時代が始まって日本が第一次世界大戦の戦勝国となり、ドイツからミクロネシア地域の一部島の管理権限を譲り受け、南洋に関連した記事が言論に本格的に登場し始める⁴。植民地という政治的な現実を考慮した場合、植民地時代以降、朝鮮の言論に登場した南洋関連の記事は大多数が領土拡張へと向かう日本帝国の欲望と深く関連があった。

この点から考えて、日本において南洋諸島は、華やかな帝国主義の時代の栄華を秘めた理想的な夢の空間ともいえるだろう。解放と合わせて「南洋諸島」という用語を社会から消し去った韓国とは異なり、日本では南洋諸島が継続して生きている用語として受容されてきたのは、そのためかもしれない。まず、日本が「南洋諸島」と呼称した太平洋のミクロネシア地域の島々は、西欧諸国、もしくは日本の支配を受けていたという点で、日本植民地の状況に置かれていた朝鮮とは同じ立場にあった。そうであるならば、植民地時代の朝鮮言論が「南洋」を見つめる視線はどのようなものだったのか。植民地時代の南洋諸島を扱う冒険小説「黄金窟」は、「南洋諸島」に対する朝鮮社会の認識を把握する上で重要な資料となる。

1 「清国軍艦の南洋巡航」『皇城新聞』(1907.5.25).

2 「南洋無人島の発見」『皇城新聞』(1907.9.4).

3 「南洋探検」『大韓毎日申報』(1909.8.21).

4 以上の内容についてはチョ・ソンユン『南洋群島-日本帝国の太平洋島支配と挫折』(ドンムントンチェックバン, 2015), pp. 41-45を参照した。

2 植民地朝鮮と南洋諸島

植民地時代の間、南洋諸島開拓を扱った記事が朝鮮の言論に頻繁に登場するが、長い歴史において朝鮮は海洋開拓には関心を持っていなかった。高麗末期、反政府勢力の鎮圧のために島を空けて海の貿易を禁じる空島政策、海禁制度が強く施行されて以来、この政策は朝鮮時代に入ってからそのまま続いていた。強力な中央集権制を掲げた朝鮮王朝の立場で、島は行政編成から除外されており、王の統治を強く適用するのが難しかったためだ。さらに、朝鮮は地形学的な特性上大陸に繋がっているため、むしろ開拓を夢見るならば、その夢は常に大陸に向かっていった。ここで新しい立場を開陳したのが、1908年11月に創刊された総合雑誌『少年』である。『少年』は、朝鮮時代に取り上げられたことのない少年たちの海洋冒険心を督励する論説と文芸物が中心を成している。

創刊号の最初のページに掲載された新体詩「海から少年へ」をはじめ、海洋冒険心を求める論説「海上大韓史」⁵、そして西欧の海洋冒険小説「ロビンソン無人絶島漂流記」にいたるまで、「海洋探検」はこの雑誌のキーワードとなっている。しかし、残念ながら『少年』が発行されたこの時期、朝鮮は大洋を支配するどころか、大陸侵略に乗り出した日本の植民地に準ずる状態に置かれていた。海洋探検の主体となるということは一たえ、朝鮮の少年たちの意志を督励するためのものだったとしても一朝鮮の現実的な能力、現実的な状況を考慮した場合に、この上なく非現実的な提案だったといえる。

そうであるならば、朝鮮の近代化のために私財を投じて雑誌『少年』を創刊した崔南善が朝鮮の歴史、朝鮮の現実的状况とかけ離れた「海洋開拓」を、なぜ近代朝鮮成立のキーワードとしたのだろうか。崔南善が大韓帝国の皇室留学生として日本の地を踏んだのは1904年10月で、この時期の日本は領土拡張のため、ロシアと戦争の真っ最中であった。たった二か月での帰国となったが、彼は日本で近代化の眩しい成果と共に、躊躇なく領土を拡張していった強靱な力を直接目撃する。日本は清を退け、ロシアと戦争をしながら、世界全域に自身の領土を拡張していた。このような攻撃的な領土拡張の雰囲気の中で「海外富源叢書」シリーズなど、海外の豊富な資源に関する一種の案内書が日本で刊行された。

「海外富源叢書」には『南洋諸島の富源』⁶という題名の、太平洋の島々に関する調査書が含まれている。さらに、南洋諸島を「富の資源」と明示した後、南洋諸島の様々な風俗を考察している。崔南善が日本に到着したのは、まさに「海外富源叢書」が刊行され始めた時期だった。十代中頃で、日本の地を踏んだ崔南善がこの本を読んだのかどうかは不明だ。しかし、明治時代の日本を埋め尽くしていた海外雄飛思想の強力な風を彼が経験したのは間違いない。そのような点から、崔南善が『少年』のキーワードに選んだ海洋開

⁵ 『少年』の創刊号から「海上大韓史」が掲載され、少年たちの海洋冒険の進取的な意志を強く求めている。

⁶ この本は南洋諸島の富源という題名の下、南洋諸島の風俗や富源について扱っている。特にフィリピン諸島について集中的に扱っている。（『活動の日本』同人著『南洋諸島の富源』隆文館、1905）。

拓思想は、日本の海外雄飛思想、厳密に言って「南洋」を含む海洋開拓思想から影響を受けたものと推定される。日本の準植民地状態に置かれていた朝鮮知識人が、日本の植民地開拓の欲望を朝鮮近代化モデルとして活用した点は、逆説的といえは逆説的なことだが、崔南善にとって日本は敵であり近代について学べる最高の教科書だった。そうであるならば、植民地時代の朝鮮言論と雑誌で頻繁に見られる「南洋諸島」関連の記事及び論説もまた、『少年』と同じ脈絡で提示されたのだろうか。それは違ったようだ。

1919年9月3日午後7時、朝鮮の首都である京城の京城女子高等学校の講堂で、オランダ人記者アルバート・レベルの「南洋食人国探検」という講演会が開かれる。主催は毎日申報社だ。講演会が開かれるの3か月前である1919年6月、日本は第一次世界大戦の平和協定であるベルサイユ条約に基づき、ドイツが支配していたミクロネシアの一部地域、つまり南洋諸島の委任統治権限を得る。日本としては、明治時代から始まった海洋開拓の夢を実現する最初の道が開かれたことになる。アルバート・レベルの講演会は日本の「南洋委任統治」決定により、未知の地である「南洋」を人々に紹介するために開催されたものと推定される。この講演会はすぐに文章にまとめられ、『毎日申報』に7回に渡って連載されたが、その内容は南洋諸島スマトラ島北部にある人肉を食べる食人国に関するものが主をなしていた⁷。「南洋諸島」、すなわち太平洋地域の島々に関する情報がほぼなかった朝鮮社会で、オランダ人の講演がどの言語で、どのような形で行われたのか、どの層が主な聴衆だったのかは不明だが、新聞記事によると講演はかなりの好評を博したようだ⁸。

新聞の評価のように、この講演会が実際に成功を収めたのかどうかは、明確にはわからない。しかし、講演内容を再び文章にまとめて7回に渡って連載したところを見ると、毎日申報社側でこの講演内容の大衆的な伝播に関して相当神経を使ったと見られる。この講演が開催される5年前、南洋諸島に関連した記事がすでに毎日申報にいくつか掲載されていた⁹。この記事に登場する南洋のイメージは、一様に野蛮な風習を持つ野蛮的な地域として規定されている。朝鮮を植民地化する過程で、朝鮮人に適用したことのあったこの規定を、日本帝国は南洋諸島の委任統治に対する正当性を裏付ける根拠として同じように使用していたということだ。

オランダ人記者のアルバート・レベルの講演もこれと同じ流れの中で行われたものと推定される。アルバート記者の言葉のように、スマトラ島地域に実際に食人の習性を持つ部族がいたのかどうかは不明だ。「食人の習性」は最も激しい野蛮状態を象徴するため、南洋の野蛮性が激しければ激しいほど、日本による南洋諸島の啓蒙の必要性が対外

⁷ この講演内容は、1919年9月6日から9月13日まで『毎日申報』に計7回(9月8日は記事なし)に渡って「南洋食人国探検」という題名で掲載される。

⁸ 記事によると、講演会当日は激しい雨風が吹き付けたにもかかわらず、講堂を埋め尽くすほど多くの聴衆が集まったという。(「南洋食人国探検」『毎日申報』1919.9.6)。

⁹ 「日本海軍に幸福な南洋野島の珍貴な風俗」(1914.10.10)、「南洋諸島の残酷美人」(1914.10.24)、「一夫多妻の南洋群島」(1914.10.27)、「対日本使節の目標」(1914.19.27)、「南洋島嶼のインド」(1914.11.23)、「戦乱中の南洋」(1914.12.03)、「南洋群島の物産と風俗」(1914.12.22)などがある。

的にさらに高まるのは当然のことだった。このように、1910年代に言論に登場し始めた「南洋諸島」の野蛮的なイメージは、1920年代を経て1930年代に入り、本格化する。例えば、南洋人は文明国の人々と比べて進化していない未開人であるため、先天的に頭脳の大きさが小さく、妊婦が出産時に大きく痛みを感じないといった主張があった¹⁰。

ここで、進化論の展開と関連して朝鮮の位置設定に関する本質的な質問が提起されるかもしれない。つまり、朝鮮と朝鮮人は文明と野蛮、文明人と野蛮人、この中でどこに位置づけるのかということだ。日本の南洋諸島統治が、野蛮的な南洋諸島を文明の状態まで引き上げるための「崇高」な理念に基づいて行われたものだとすると、南洋諸島と同様に日本に統治されている植民地朝鮮も南洋諸島と同じ立場であった。日本帝国の立場から見ると—もちろん、程度の差はあっただろうが—朝鮮であれ、南洋諸島であれ教化と啓蒙の対象であるという点で同じ存在であることは間違いなかった。これに対し、朝鮮の言論は極めて自己中心的でありながら、自己分裂的な態度を見せている。「南洋諸島は朝鮮と比べて、三千年も文化が遅れている場所」¹¹であると述べ、日本と朝鮮の間で設定されていた文明と野蛮の関係を、朝鮮と南洋諸島の間に適用し、南洋諸島を他者化させているのだ。

日本の植民政策と朝鮮の現実を考慮した場合、この時期の朝鮮社会は日本帝国が掲げた文明化段階を満たすほどは発展されていない「野蛮的」な状態だった。日本の立場で考えると、朝鮮統治の名分を得るためにも朝鮮=野蛮のイメージの維持は必須的な事であった。そうであるならば、当時の朝鮮社会はなぜ、朝鮮人=文明人という錯誤、錯覚、自己幻想を引き起こしたのだろうか。様々な理由があるだろうが、情報習得が制限されている状況の中、日本の情報をそのまま受容しながら、日本帝国の理念を植民地朝鮮の理念として受容するしかなかった植民地特有の現実が一つの要因として取り上げられるだろう。平たく言えば、植民地朝鮮社会は自分でも知らずのうちに日本帝国が流布したイメージ、イデオロギーを自分のものとして内面化させていたといえる。植民地という被圧迫状況にありながら、南洋人を教化の対象として設定し、南洋諸島を開拓の対象として把握していた、当時の植民地朝鮮の言論における逆説的な立場は、まさにここからはじまっていると見てもいいだろう。

南洋人=野蛮人というイメージの流布とは別に、1920年代中盤から南洋諸島と関連して注目に値する新しいイメージが朝鮮社会に流布される。1926年3月26日付の朝鮮日報には、南洋産植物で作られた気管支炎薬の広告が掲載される。広告によると、この薬は南洋の希少植物で作ったもので、どのような人に対しても適しており、いかなる副作用も起きない一種の万病薬である¹²。すべての病を治す薬というものがあるはずがない

10 チェ・ヨグ「人類の過去と将来」『東亜日報』(1929.7.31) (『東亜日報』では、この記事が掲載された同日に「頭脳の話」という記事を掲載し、骨相学と進化論を繋げている。)

11 「南洋の島話」『毎日申報』(1933.7.13)。

12 この薬は日本の河合洋行の製品で、広告によるとこの薬を20日間服用するだけで、気管支炎と息苦しさが止まるという。(「十年の息切れ症と五年の気管支に」『朝鮮日報』1926.3.26)。

が、この薬は「南洋諸島」という未知の地域の神秘性を巧妙に活用し、人々に幻想を抱かせていたのだ。「喜不自勝するおかしな植物薬」というこの薬のキャッチコピーのように、この時期の朝鮮において、南洋地域はふしぎで奇妙な、魔法のような世界が広がる幻想の空間として流布されていた。さらに、「ヤシの木」がある常夏国¹³でありながらも、その夏が暑くもなく「季節は一年中秋、水は常に夏」¹⁴である場所、このように南洋諸島はまさしく理想郷として朝鮮社会に伝えられていた。

「十年の息切れ症と五年の気管支に」(『朝鮮日報』1926.3.26)

チェ・ヨグ「人類の過去と将来」(『東亜日報』1929.7.31)

¹³ 『朝鮮中央日報』1934年8月27日付に掲載された南洋関連の記事に登場する南洋のイメージは、「季節は一年中秋、水は常に夏」として描写されている。また、この記事では「海を越えて飛躍しよう」と述べ、南洋行を推奨している。

¹⁴ この記事の掲載が暑い真夏であったという点は、非常に興味深い。「季節は一年中秋、水は常に夏！南洋はどのような場所なのか。八月の好奇心は海を越えて飛躍しよう。」(『朝鮮中央日報』1934.8.27.)

貧困のため、レンギョウの風呂敷を背負って寒い満州の地へ向かった朝鮮人が、ヤシの木が生い茂る南洋諸島の写真を見て、幻想にあふれた風聞を耳にしたとすれば、どのような気持ちになっただろうか。船に乗って海を渡りたどり着ける遠い場所、名前も聞いたことがない見知らぬ地域だが、多くの朝鮮人たちが生活のためにこの場所への移住を考えるのは、当然のことだった。実際に満州事変によって国際連盟を脱退し、不安定になった南洋諸島の委任統治権が確実に認められた1935年前後に、日本帝国が南洋諸島の開拓に向けて朝鮮人労務者の送出を本格的に行い、このイメージは朝鮮社会に本格的に流布される。日本帝国の立場から考えると、経済的利益の送出のためにも、移民による人口移動効果を作るためにも、東南アジア及び南中国と連携する太平洋上の軍事的拠点の確保という側面からも、朝鮮人の南洋移住は絶対的に必要であった¹⁵。

3 「黄金窟」の少年たちと冒険地としての南洋

1937年8月12日から19日まで、『朝鮮日報』にはイ・ヨンチュンという人物の南洋諸島旅行記である「南洋行」が7回に渡って掲載される。同年8月9日、国際連盟主催でジャワで開催された「東洋農村衛生会議」への出席が旅行の目的で、旅行記はそれと関連した内容が含まれている¹⁶。会議開催の4か月前である1937年4月、朝鮮で初めて釜山とジャワ間の定期航路が開設される。朝鮮と南洋諸島の貿易のために朝鮮総督府が、南洋海運の日本-ジャワ定期航路、そして大阪商船の日本-カルカット定期航路に毎月1回、釜山を寄港地として入れるよう命令した結果だった。イ・ヨンチュンはまさにこの南洋海運の商船に乗って釜山を出発し、ジャワに向かったのだ。釜山から南洋海運の商船に乗って台湾、シンガポールを経由してジャワに到着するまで、運賃、経由地、船室の構造などが旅行記の中に詳細に説明されているところを見るに、「南洋行」の掲載には釜山-ジャワ間の定期航路開設祝いと宣伝の意味があったようだ。

定期航路の開設を宣伝して祝うと共に、「南洋行」の著者であるイ・ヨンチュンは、旅行記で南洋諸島の肯定的なイメージ伝播に相当な力を注いでいる。彼は、以前は南洋諸島が「未開の人種だけが暮らす点々と散らばった」島々だと思っていたが、いざ来してみると産業と文化が発達していると語り、南洋諸島に対する朝鮮社会一般の間違った認識の改善を求めている。さらに、南洋諸島には「荒蕪の廣地となった數萬町歩の平野」が「大規模な實際家を待っている」と述べ、朝鮮人の南洋移民を督励している¹⁷。一年中寒い日

¹⁵ 以上の内容は、チョン・ヘギョンの「日本帝国末期の南洋群島の朝鮮人労働者」を参照した。(チョン・ヘギョン「日本帝国末期の南洋群島の朝鮮人労働者」『韓民族史運動研究』Vol.44, 2005, p.174)。

¹⁶ イ・ヨンチュンの「南洋行」は、「東洋農村衛生会議へ向かいながら」という副題をつけて発表された見聞録である。『朝鮮日報』ではすでに1923年に、成完生という筆名を持った記者が「南洋行」という題名の旅行記を連載している。しかし、1923年の「南洋行」と1937年の「南洋行」は、南洋に対する認識において大きな違いを見せている。

¹⁷ イ・ヨンチュン「南洋行 七」、同上(1937.8.19)。

がなくて暖かく、耕作する地はあふれるほど広がっているが、交通の便がなくただ理想郷として存在していた地域が、定期航路の開設により朝鮮人にとって近づける現実の領域となっていた。イ・ヨンチュンの旅行記は、幻想の領域にあった南洋諸島が、現実として近くに来たということ、その点を朝鮮の読者に伝えていた¹⁸。

「南洋行」が発表されたその年、11月に探偵小説専門作家の金来成が、インド洋へ冒険に旅立つ少年たちを描いた「黄金窟」を発表し、言論の「南洋諸島」の盛り上げに賛同する。「探偵小説」というジャンル名を掲げて発表されたこの小説は、偶然のきっかけでインド洋のとある島の宝地図を手に入れた孤児の少年・少女たちが、宝を求めて旅立つ中で経験する冒険が主な内容である。彼らは一緒に船に乗り、十日間ほどかけて目的地であるインド洋のセイロン島近くの鶏龍島へ向かうが、この航路は「南洋行」のイ・ヨンチュンが釜山から出発した朝鮮唯一の南洋定期航路とは異なる。彼らは釜山ではなく、黄海から「太陽丸」に乗って上海、東シナ海、台湾海峡、南シナ海を通して、食品を補給するためしばしシンガポールに降り立ち、マラッカ海峡を通してインド南端のセイロン諸島、現在のスリランカのコロンボを通して鶏龍島に到着する旅路を選択している。

1937年4月に開設されたばかりである大阪商船の釜山-カルカッタ間の定期航路があるにもかかわらず、金来成は小説でなぜ現実には存在もしない黄海出発という設定にしたのか、興味深いといえは興味深い部分だ¹⁹。「黄金窟」に続いて発表したもう一編の少年探偵小説『白仮面』で、金来成は事件の中心地として「黄海」、正しく言えば「鎮南浦」を設定し、黄海に対して非常に執着する姿を見せている。「黄金窟」が発表された1937年11月は、日中戦争真ただ中の時期で、朝鮮の海洋開拓の対象は中国と接している黄海でなければならないのは、当然のことだった。「黄海」出発という設定が現実と合っていなかったとしても、中国を相手とした日本帝国の戦争真ただ中の時期だったという点を考慮すると、中国と接している黄海こそ海洋開拓を夢見る植民地朝鮮の少年たちの出発点としてふさわしかったのだ。

中国を通して、南洋諸島へ植民地朝鮮の少年たちを引き入れるために、「黄金窟」に描かれた南洋諸島は何よりも魅力的な場所である必要があった。素敵なヤシの木園の写真数枚や、一年中夏だから寒くないという話、耕作する土地があふれるほど広がっているという言葉だけではどこか足りなかった。明確に目に見える魅力、人々の欲望をかき立てるような確かなものが必要だった。ここで、金来成は最上の案を提示するのだが、それが「黄金」である。このように、始まりから華やかに出発した旅で、あらゆる苦難を経験しながらついにたどり着いた目的地は、小説の題名のように「黄金窟」、黄金で作ら

18 特に南洋の物品が続々と輸入され、1930年代の朝鮮において南洋諸島は、人々の日常に浸透していた。平壤の牡丹公園には、南洋から輸入した猿が展示されているかと思えば、『朝鮮日報』1931.11.17) 慢性の痔について説明する言論記事では、痔を説明するために「南洋語」で痔をどのように表現しているのか、例に挙げながら説明もしている(『東亜日報』1931.7.31)。一種の南洋ブームが起きていたといえるだろう。

19 1937年、朝鮮総督府が汽艦補助金を支援したことに伴い、釜山-インド間の直航が可能となる。大阪商船のカルカッタ行きは、横浜から出発して名古屋-神戸-釜山-香港-シンガポール-カルカッタの航路となっていた。これに関しては「天竺国も直航可能」『朝鮮日報』(1937.2.18)を参照した。

れた場所ではなかった。孤児の少年、少女たちと彼らの保護者であるユブルラン探偵が、いざ目的地に到着して手に入れたのは、巨大な黄金ではなく、黄金の王冠たった一つだったという点は注目に値する。

彼らが手に入れたのは、黄金のみで作られた王冠ではなく、あらゆる宝石がついた黄金の王冠だ。孤児の少年・少女たちの希望通り、素敵に「孤児院」を建てて、お金を分け合うには黄金の王冠一つの黄金が作り出す経済的な価値は、途方もないものだった。その夢を叶えるには、黄金の王冠を飾った宝石がとてつもない経済的価値を持っていないければならず、インド人の盗賊の群れが王冠を盗むために殺人を犯すのみならず、遠い朝鮮までやってくるほどであったことを考えると、王冠についていた宝石はそれだけの価値があったのだろう。それにもかかわらず、金来成はあらゆる宝石をつけた王冠の名の代わりに、小説に一度も登場しない「黄金窟」を題名につけている。金来成がなぜこのように「黄金」を前面に掲げているのか理解する上で、この時期に朝鮮を襲った黄金狂熱風は重要な糸口となる²⁰。

「黄金窟」が発表された1937年の朝鮮は、黄金を見つけようという人々でごった返す、いわゆる「黄金狂時代」²¹が繰り広げられていた。これまで耕作してきた綺麗な田畑を、黄金を探すためむやみに掘り返す人々が生まれ、黄金の上手な掘り方をキーワードに掲げた申泰岳の『朝鮮鑛業要領論』が1935年のベストセラー1位に上るほど、この時期の朝鮮の黄金狂熱風はすさまじかった²²。その結果、大恐慌と失業、物価暴落で最悪の危機的状況に置かれていた1930年代の朝鮮では、黄金が出そうだという場所や、黄金が出るという伝説がある場所には、鍬を持って、もしくは簣を持った人々が集まり、狂ったように地面を掘り返すのが日常的な風景となるほど、人々は黄金を求めている。ここには、大恐慌から抜け出すために金鉱業を国の基幹産業として掲げ、有名な金鉱に金探補助金まで支給するなど、様々な金鉱保護政策を広げ、朝鮮全体を金鉱採掘地域にした日本の政策が決定的要因として作用している²³。

このように、1930年代の朝鮮で黄金は、「人が黄金を食べる」²⁴という文まで一もろん、治療剤として黄金の使用について扱ったものではあるが一登場するほど万能の力

20 この時期に黄金万能時代という単語が流行していた。一つの例として、1936年5月1日付の『東亜日報』に掲載された「應接室」というコーナーで読者が質問して、記者が答える一種の読者相談室の質問の中で「黄金万能時代と言いますが、本当に黄金さえ持っていれば、できないことはないのですか?」という苦悶に満ちた相談が寄せられている。

21 安夕影は、このような時代像を称して「あらゆる狂の時代を過ぎ、今は黄金狂時代が来た。金鉱！金鉱！金鉱！日本の本位貨不足により、為替が暴落したせい、そういうわけで金鉱の許可を簡単にしてくれるのか、誰も彼も金鉱、金鉱と言って利欲に耳聡い良民たちが大小夢だ」と指摘している。（安夕影、「時代像：黄金狂時代」『朝鮮日報』1932.11.29）。

22 広告には「鉱業は一攫千金の『夢』ではない。『夢』の中で黄金を掘ると失敗しやすいため、満天下 鑛業家諸位よ、まずこの本を読め」と明示されている。（『朝光』1935.11）。

23 朝鮮に押し寄せた黄金狂熱風と関連した全般的な内容については、チョン・ボングァンの『黄金狂時代』（サルリム、2005）を参照した。

24 この文は、金の効率性について説明しながら「金が貨幣用、蓄財用としてのみ貴重なのではなく」、「人体に消費」されることさえあると述べている。（李健赫「人が金を食べる」『鑛業時代』1937.1, p.19）。

を持った存在だった。人々にとって「黄金」こそダイヤモンドをはじめとした、あらゆる宝を凌ぐ最高の価値として認められていた。このような時代に、金来成は黄金にあふれたイメージを象徴する「黄金窟」を小説の題名に掲げ、読者の興味を刺激する一方で、黄金に対する朝鮮人の熱望を自然と南洋へ繋げたのである。これは驚くべき感覚だった。黄金窟がある南洋、このイメージこそ南洋を宣伝するいかなるイメージ、例えばヤシの木があって、常に夏で、農業を行う土地があふれるほど広がっているという宣伝イメージとは比べものにならないほど強い魅力を持っていた。少なくとも1937年の朝鮮人にとって、「黄金」という用語が持つ力を、金来成は正確に見抜いていたのだ。

「黄金」を求めて南洋に旅立った少年・少女の冒険の世界を描いている「黄金窟」が、単純なファンタジー小説の範囲を超え、強力な現実性及び政治性と深く繋がっているのはこのためである。特に、この小説が新聞に連載されていたのは日中戦争が勃発し、朝鮮もこの戦争に巻き込まれていた時代であった点から、この小説に内在された政治的雰囲気、言い換えるならば少年たちの冒険の政治性は、さらに強まっていく。中国を越え、太平洋とインド洋を越えて、世界全域に領土を拡張しようとしていた日本の欲望と、小説に出てくる少年たちの冒険の行方が互いに一致しているのだ。そうであるならば、「黄金窟」の少年・少女たちの長きに渡る冒険の末にたどり着いた場所はどこだったのだろうか。彼らは、自分たちが描いた夢の通り、孤児院を建てるなど公益事業を行いながら新しい朝鮮の建設に尽力したのだろうか。

4 南洋開拓と殉忠の敘事

「黄金窟」は孤児の少女である「ベクヒ」が、父親から貰った宝の地図を持って、友人らと共に宝を求めて南洋の島へ冒険に旅立つ物語だ。この小説では宝の地図の持ち主である「ベクヒ」と友人の「ハクジュン」が、宝を見つけたら何をするのかについて話すシーンが登場する。

ベクヒ、これから山のようなお金が君のものになるとしたら、どうするつもりだい？

「私は、半分はハクジュンにあげるよ。それから半分は、私たちのように親がない可哀想な子どもたちに分けてあげるの」

「そうだな。そのお金で素晴らしい孤児院を建てよう。百貨店のように大きな家を建てて、そして朝鮮全域から可哀想な子どもたちを全員集めて、勉強させて、運動もさせて！あつ、それからベクヒ、君は女子クラスの模範生になって、僕は男子クラスの模範生になって……………」

「ああ、とっても嬉しい！いいわ！ハクジュン、あなたも嬉しいでしょう？」²⁵

²⁵ 金来成「黄金窟10」『東亜日報』(1937.11.11).

「黄金窟」の少年・少女は、黄金を見つけたら朝鮮に持って帰り、孤児院を建てようと語っている。しかし、この希望がどこかおかしく感じられるのは、希望自体が実に非現実的であるためだ。おいしいものが食べたかったり、カッコいい物を欲しがったりするのが子どもらしい発想で、現実的だといえる。もちろん1937年の朝鮮で、孤児の少年たちが船に乗って南洋諸島へ冒険に旅立つということ自体が、実に非現実的な設定であるため、「孤児院設立」程度の非現実性は目をつぶることもできるだろう。しかし、このように個人の欲望が完全に取り除かれたまま、公共の善への献身のみを望む人々が、この時期の小説から繰り返し発見されるならば、この非現実性は社会的な雰囲気として考える必要がある。

1930年代中盤の朝鮮で発表されたベストセラーの恋愛小説には、このような非現実的な人物が少なからず登場する。例えば、金来成の「黄金窟」と同じ時期に、同じ東亜日報の紙面に発表された金末鳳という小説家の恋愛小説「密林」の主人公は、貧民共同体と貧民託児所を作ろうと考える。そして1939年に発表された恋愛小説「愛の水族館」の女主人公も貧民託児所を運営すると述べ、朝鮮最高のベストセラーだった恋愛小説「殉愛譜」の主人公も社会福祉事業に自分の人生をかけると語っている。このように、蓋然性が欠如した慈善事業のモチーフが1930年代中盤に発表された植民地朝鮮の小説で、なぜ、突然、繰り返し登場しているのか、その理由を正確に見つけ出すのは困難だろう。政治的抑圧が強まり、激しい経済不況に陥っていた社会的状況の中、社会主義理想を迂回的に表すためであったかもしれないし、分かち合いのキリスト教的精神を大衆に伝えるためだったのかもしれない。どちらにせよ、個人の欲望を完全に排除させた人間、他人のために献身する「神聖な心」を持った人間がある一定の時期に植民地朝鮮で頻繁に登場したということ自体が、注目に値することだ。

「自分」の幸せ、「自分」の成功を捨てて、「共同体」の幸せ、「共同体」の夢の実現を先立たせる実に理想的な世界が、1930年代に発表された数々の朝鮮小説で繰り返し登場しているのだ。だからといって、この時期の朝鮮がこのような崇高な意志が自然と登場するほど自由で、平和だったのかというとそうではない。この理想的な世界が広がっていた時期は、満州事変から日中戦争へ続いていた戦時体制で、戦争を成功させるために皇国臣民化政策が朝鮮社会で強く実施されていた時であった。特に「黄金窟」が発表された1937年10月には、「私共は、大日本帝国の臣民であります」という文章から始まる「皇国臣民の誓詞」が公布され、朝鮮の全出版物の1ページ目に誓約が掲載されるだけでなく、全朝鮮人がこの誓約が暗唱されていた。それは、子どもも例外ではなかった。

小説『黄金窟』の挿絵。左：『東亜日報』1937年12月24日 右：『東亜日報』1937年12月22日

天皇陛下の臣民となり、「忠誠で君国に報い」、「信愛・協力して団結」を固めることは「自分」を捨てた時に可能なことだ。それほど、「皇国臣民の誓詞」は当然天皇に対する朝鮮人の完全な献身を求めている²⁶。金銀財宝を手に入れても、おいしいものを思う存分食べたり文房具を買ったりせず、「孤児院」設立にそのお金を全て使用する「黄金窟」の少年・少女たちの利他的な姿から、純粹さよりも政治的脈絡が感じられるのはこのためだろう。さらに、この子どもたちの利他的かつ献身的な姿と、「国家」と「天皇」に対する絶対的な献身を誓約する「皇国臣民の誓詞」を暗唱する子どもたちの姿が、オーバーラップするのもやはりこのためだろう。もちろん、「黄金窟」の子どもたちの利他心と献身性の強調が「自分」よりも「国家」を先立たせ、「自分」を「天皇」に一体化させていた暗黒な戦時体制に歩みを合わせることだったのかについては、議論の余地がありそうだ。そのような点で、「黄金窟」の初回の小題目を幼い軍人という意味の「小勇士」²⁷とつけた金来成の選択は、「黄金窟」の少年たちが行った冒険に内在された政治的脈絡を読み取ることができる重要な根拠となる。

「黄金窟」の小勇士たちの冒険が戦時体制の政治的状況と緊密に繋がっていたとすれば、彼らの冒険の最終到着地はどこだったのだろうか。この点で、「黄金窟」の発表から5年後である1942年に発表された崔貞熙の詩「南方へ送る夢」と朱曜翰の詩「十二月七日の夢」は注目に値する。5年という時間的距離にもかかわらず、この二編の詩に注目するのは南洋諸島の冒険の実態が描かれているためだ。同時期に発表された二編の詩で描かれる南洋諸島の風景は、異質である。崔貞熙の詩「南方へ送る夢」の中での南洋は、それまで朝鮮に流布されてきた「南の島」の理想的なイメージの総合版と言えるほど幻想的だ。

²⁶ この点で、「殉愛譜」の漢字語に「殉」という字が含まれている点は注目に値する。さらに、小説の「死ぬことで自分を人類に捧げたその愛の犠牲！どれほど美しい世界だろうか、いや、どれほど自由な世界だろうか」という小説の句もやはり注目に値する。（「殉愛譜」と戦時体制の政治的状況間の関係については鄭惠英の「殉節する愛の時代」『大衆文学の誕生』（アモールムンディ、2016）、pp.216-217を参照した。）

²⁷ 「小勇士」という単語は、漢字そのまま解釈すると勇気のある子どもともいえるが、植民地時代の朝鮮で「小勇士」という単語は、戦争の軍人に繋がるイメージで使われていたようだ。例えば、1929年に『東亜日報』で翻訳、連載されたロンバルディの「愛の学校」で、「ああ、ああ、勇敢な少年よ！熱烈な愛国の小勇士よ！（イ・ジョンホ訳「愛の学校」3『東亜日報』1929.2.9）という文章が登場する。

南洋、その場所は「森の影にえびす草の実がぶどうの房のように熟し、アフリカのチューリップとシソが常に咲いていて、温かい風が空から吹き、海に広がる日ならば、花々がそれぞれ誇る赤いにおい、白いにおい、黄色いにおい」²⁸が漂う夢のような場所だ。崔貞熙はこの理想郷を一人で知っているのがもったいないと思ったのだろうか。「一年中、いつでも賛美を忘れずに暮らせるこの場所へ行こうではないか」と読者に南洋行を強く勧めている。

しかし、1942年の南洋諸島は、少なくとも毎日「賛美」の歌を歌うほど素敵な楽園でも、誰かに共に行こうと自信を持って勧めるほど自由で平和な場所でもなかった。ちょうど一年前、1941年に日本のハワイ侵攻により太平洋戦争が始まり、南洋諸島は日本が引き起こしたいわゆる「大東亜戦争」の真ただ中に位置していた。この戦争のために朝鮮内では国民一人一人が皆軍人となる「国民皆兵」が主唱され、これにより朝鮮の「老人も、若者も、男も、女も、ともかく日本の臣民となった者はすべて殉忠の大きな意志をきちんと知り、ひいては自分の命を捧げて国を守る偉大な責務を担っている」ことを心に刻むよう強要された²⁹。朱曜翰の詩「十二月七日の夢」のように、夢の中でも「自分の口が戦闘機のくちばし」となり、「自分の両足が飛行機の尾」となり、「ソロモン島」、つまり南洋諸島の島に行って「口から唾を吐くたびに無数の爆弾がはじけ飛んで、爆弾の一つが軍艦を一つずつ、面白くも爆発させてしまう」³⁰ほどの激しい戦意と君国の情熱が朝鮮人たちに要求されていたのだ。

まるで古代神話に登場するセイレーンの歌のように、南方の幻想的なイメージに惹かれて貧しい朝鮮人たちが南洋へ向かい、そこには命を捧げて国を守る「殉忠」、言うならば日本の戦争を勝利に導くための献身的な死が彼らを待っていた。この延長線上で考えた場合、黄金の幻想に酔い、南洋へ向かった「黄金窟」の少年たちが冒険の終わりに対面したものが何だったのか予測がつく。彼らが到着した場所は「黄金窟」ではなく、巨大な戦争が繰り広げられる戦場だった。「孤児院」を建てて貧しい子どもたちと一緒に生活するということは、単に彼らの夢であるだけで、彼らを待っていたのは命を捧げて天皇と日本帝国を守る「殉忠」、つまり死であったのだといえる。実際に「黄金窟」が発表された1937年11月は日中戦争の時期で、少年たちの幻想的冒険が許されるほどの余裕はなかった。1937年3月、朝鮮総督府が35万ウォンの経費をかけて大規模防諜機関を新設³¹するなど、「防諜」思想が朝鮮全域に強化され、あらゆる力が戦争に集結していた。

子どもだからといって、例外ではなかった。子どもの防諜思想の強化を目標として「少年探偵団」という題名の防諜小説が発表されるほど、子どもたちにも防諜思想が強く

28 崔貞熙「南方へ送る夢」『大東亜』(1942.3), p.169.

29 「国民皆兵と兵役観」『新時代』(1942.12), p.60.

30 朱曜翰「十二月七日の夢」『新時代』(1942.12), p.98.

31 朝鮮総督府警務局で大規模防諜機関を新設し、京城放送局の強力な電波を利用して満州一帯の情報を集めるというのが主な内容である。以上の内容については、「大規模防諜機関」(『朝鮮日報』1937.3.23)を参照した。

求められていた。このような時期だったため、南洋へ向かった「黄金窟」の冒険は、世界中を対象とした日本帝国の領土拡張の欲望と一致していたと見る方が正しいだろう。これは「黄金窟」の連載期間とほぼ同時期に発表された金来成の少年冒険小説「白仮面」で、少年たちの冒険が、結局は日本帝国を崩そうとする敵国のスパイたちの陰謀を防ぐことに繋がっていたという点からも確認される。「白仮面」だけではない。スペイン、イギリス、インド洋を航海していた大人たちの冒険を主な内容として、1943年に発表された金来成の防諜小説「台風」もまた、その冒険の目的はスパイの陰謀を崩し、日本帝国が戦争に勝利するということがあった。金来成の二編の冒険防諜小説、「白仮面」(1937. 6)と「台風」(1943)の間に発表されたもう一つの冒険小説「黄金窟」の冒険が、日本帝国が引き起こしたいわゆる「聖戦」の政治的脈絡から抜け出せないのは、当然のことだった。

5 残りの問題

金来成の「黄金窟」が発表されてから3年後、江戸川乱歩の「新宝島」が発表される。内容は、やはり黄金を求めて南洋諸島へ旅立った少年たちの冒険物語だ。小説の序文で江戸川乱歩は、「政府は輸出入の決算額の決済に必要な金を確保しようと百方苦慮していた。このような状況が日本の少年たちにとって、黄金境発見の空想となって、この物語にも反映されたのであろう」³²と述べている。植民地の少年たちであれ、帝国の少年たちであれ、黄金狂熱風の中で黄金を求めて南洋諸島へ旅立ったという点では、皆同じである。しかし、望んでいた黄金を見つけて意気揚々と朝鮮へ帰ってくる「黄金窟」の少年たちとは異なり、「新宝島」の少年たちは帰ってくることができない³³。

少年たちを黄金の国に残したまま、小説の幕を下ろす江戸川乱歩の意中がどこにあったのかはわからない。しかし、確かなことは「黄金窟」と「新宝島」の少年たちがたどり着いた南洋諸島は強大国間の力の衝突が続く場所であり、遠からず巨大な戦争の砲火の中へと入っていく場所だった。この危険な場所から大量の黄金を持って無事に帰国できる人が、果たしてどれほどいただろうか。もちろん、「黄金窟」が発表された1937年、南洋諸島が依然として富源だったといっても、果たして植民地の少年たちに黄金を持って帰国する、そのような恵み深い機会が与えられるだろうか。「黄金窟」の「南洋」が幻影として残り、「黄金窟」が国策小説となるのは、このためである。

³² 江戸川乱歩『新宝島』(兪在眞訳、宝庫社、2021)、p.13.

³³ 兪在眞「江戸川乱歩の国策小説と南洋表象」『韓国日本学会学術大会』(韓国日本学会、2021)、pp.455-456.

参考文献(Bibliography)

基本資料

『朝鮮日報』, 『東亜日報』, 『大東亜』, 『鑛業時代』, 『新東亜』, 『新時代』, 『朝鮮中央日報』, 『皇城新聞』, 『大韓毎日申報』

論文

- 兪在眞(2021)「江戸川乱歩の国策小説と南洋表象」『韓国日本学会学術大会』Vol.2021 No.2, pp.455-456. Jae-jin Yu(2021) Edogawa Ranpo no Kokusaku Shōsetsu to Nanyou Hyōshō, *Academic Conference of the Japanese Study of Korea*, Vol.2021 No.2, pp.455-456.
- チョン・ヘギョン(2005)「日本帝国末期の南洋群島の朝鮮人労働者」『韓国民族史運動研究』Vol.44, p.174. Jung Hye-kyung(2005) Nihon Teikoku Makki no Nanyou Guntou no Chousenjin Roudousha *A study on the history of the Korean national movement* Vol.44, p.174.
- チョン・ヘギョン(2006)「1920~30年代の植民地朝鮮と『南洋群島』」『韓国民族運動史研究』Vol.46. Jyng Hye-kyung(2006) 1920~30Nendai no Shokuminchi Chousen to 'Nanyou Guntou' *A study on the history of the Korean national movement* Vol.46.
- ソン・ワンボム(2021)「1940年代『帝国・日本』の『南洋』認識:いわゆる『南進論』と澤田謙の『南洋民族誌』を中心として」『日本研究』 Vol.36. Song Whan-bhum(2021) 1940 Nendai 'Teikoku Nihon' no 'Nanyou' Ninshiki: Iwayuru 'Nanshinron' to Sawada Ken no "Nanyou Minzoku-shi" o Chushintoshite *Japanese Studies* Vol.36.

著書

- 江戸川乱歩(2021)『新宝島』兪在眞訳, ソウル:宝庫社. Edogawa Ranpo(2021) *Shin Takarajima*, Trans by Jae-jin Yu, Seoul: Bogosa.
- チョン・ボンゲン(2005)『黄金狂時代』ソウル:サルリム, Jun Bong-kwan(2005) *Ogonkyoujidai*, Seoul: Salim.
- 鄭惠英(2016)『大衆文学の誕生』ソウル:アモールムンディ. Jung Hye-young(2016) *Taishu Bungaku no Tanjou*, Seoul: Amormundi.
- チョン・ソンユン(2015)『南洋群島-日本帝国の太平洋島支配と挫折』ソウル:ドンムントンチェクバン, Jo sung-yoon(2015) *Nanyou Guntou-Nihon Teikoku no Taiheiyōjima Shihai to Zassetsu*, Seoul: Dongmoon bookhouse.